

# 明治俗語革命期の「僕」と「小生」

## —In Reference to the First Person Pronouns in Natsume Soseki's Letters—

れいのるず秋葉かつえ

### 要 旨

明治維新は、社会組織の基盤をひっくり返すような革命的な変革であった。階層や職業によって人がタテに配置されその上下関係の価値だけなことさらに強調される歴史のなかで発達した言語は、自由と平等の民主主義を理念とする欧米型の近代社会では機能しない。英語を国語にしようという考えが持ち出されるほど、日本語は混乱した。日本語をどうするか？それが維新の子供たち—維新を担った武士たちの子供の世代に属する文学者たち—にとっての第一の課題であった。

欧米のような近代文学の伝統をつくりあげるために、言文一致運動がはじまった。幕末の勤王運動の思想的リーダー、吉田松陰を維新の子供の一人夏目漱石と比較すると、連帯原理の自称詞「僕」が、漱石時代の自称詞の主流になり、そこを定点に「言文一致体」が出来上がったことがわかる。Auto/Biographical Researchの考え方にしたがって漱石の書簡の文体を観察していくと、漱石がイギリス留学に際して「言文一致の会話体」を宣言し、実践した事実が見えてくる。

キーワード：維新の子供たち、言文一致、連帯原理、権力原理、Auto/Biographical Research

### 1. はじめに—社会変化と言語変化

明治維新は、日本の歴史上最も過激な変革であった。士農工商の身分制度が崩壊し、突然に四民平等が唱われるようになった。日本の近代化は、構造的に言えば、極端なタテ社会をヨコ社会に向かって組み立て直す社会変革であった。階層や職業によって人がタテに配置されその上下関係の価値だけなことさらに強調される歴史のなかで発達した言語は、自由と平等の民主主義を理念とする欧米型の近代社会では機能しない。初代文部大臣の森有礼は、明治5年、イエール大学の言語学者ウイリアム・ドワイト・ホイットニーに

手紙を書いている。「我が国の話し言葉は、めちゃくちゃで、アルファベット文字で書いてもわけが分からず、これでは日本は時代についていけない。豊かに発展しつつあるヨーロッパ言語を採択して、学校教育に取り入れ、徐々に今ある言語をなくしていかなければならない」と<sup>(1)</sup>。自分の国の言葉をなくして外国の言葉を公用語にしようという考えである。文部大臣がためにそう考えなければならぬほど、当時の日本語状況は絶望的なごったがえしだったのである。

そして維新戦争の現場跡に投げ出されたのが維新を担った武士たちの子供の世代に属する文学者たちであった。桂（1995：8）は、彼らを「維新の子供たち」と呼ぶ。この小論<sup>エッセイ</sup>で言及する「維新の子供たち」の名前を（生まれ年を附して）挙げておこう。坪内逍遙（1859）、森鷗外（1862）、二葉亭四迷（1864）、幸田露伴（1867）、夏目漱石（1867）、正岡子規（1867）である。欧米の近代文学のような作品を書かなければならない。しかし、手元にあるのは漢文を主体にした書き言葉か、平安時代から続いてきた文語体か、その混合変形でしかない。江戸時代に発達した様々なスタイルの戯作はエリート知識人に烈しく排撃され、新しい文学を目指した逍遙や二葉亭からも批判され、近代文学の視野からはずされた<sup>(2)</sup>。

桂（1995）は、さらに、アンダーソンの「ナショナリズムの起源」論をもとに、言文一致運動を含む全体を「<sup>ヴァナキュラリズム</sup>俗語革命」と呼ぶことを提案している。「<sup>ナショナリズム</sup>国民主義」の実質化として深い革命性をもつ言語変革だという解釈である。

このエッセイの目的は二つある。一つは、幕末維新革命の激動のなかで連帯志向をもつ主体のアイデンティティ表示として普及した自称詞「僕」と「言文一致」の関係を観察すること。そこから「僕」と「小生」だけが維新をくぐり抜けて生き伸び、その他の自称詞が急速に整理縮小されつつあったこと、それと同時に伝統的な書簡文体（いわゆる「候文」）が、俗語的文体（「言文一致」）に転位していった現実が見えてくる。もう一つは、漱石の伝記的<sup>biographic</sup>情報を積極的に視野に入れることによって、Auto/Biographical Research（以下、「A/B R」とする）の方法で言文一致問題にアプローチし、そのメリットを試してみることである<sup>(3)</sup>。そうすることによって、漱石が

「言文一致」を意識的に実践することになったきっかけがイギリス留学であったことも明らかになる。

## 2. 江戸から明治へ

「僕」は、大陸では「しもべ」「めしつかい」の意味であり、家僕たちの間で謙譲の自称詞としても使われていたという。日本では江戸後期のある時点で実証的な学問に向かう学者たちの間で発見され、幕末維新の激動のなかで連帯志向をもつ主体の書簡自称詞として広がった<sup>(4)</sup>。しかし、「僕」によって、革命を語り、ネットワークを広げ、日本を守ろうとして戦った青年武士たちの姿は、維新とともに姿を消すことになった。そして、「志士の連帯」の自称詞として機能していた「僕」もその政治的な意味を失って宙に浮いてしまった。

<明治>の始まりは、「僕」にとって闇だった。しかし、「僕」はその闇を通り抜けて生き延び、緊急の課題であった俗語革命に関与し、近代の主要な自称詞として復活した。それはどのようにして可能だったのか。加藤（1982）の調査が、重要な手掛かりを与えてくれる。

加藤（1982）は、『安愚楽鍋』から『雁』まで31の小説の会話文に使われた「僕」をすべて丹念に観察し、明治20年以前、20-30年、30年以降に区切って分析し、解説している。

明治初年に書かれた小説の会話文には「僕」がきわめて少ない。加藤の挙げる最初の「僕」の例は、『安愚楽鍋』（仮名垣魯文の滑稽本、明治4年）からで、田舎ザムライが牛鍋を突っつきながらの会話で使う「僕」など、4例。『柳橋新誌』（成島柳北の漢文戯作体、明治4年）に、生文人とか書生の会話に出てくる「僕」2例を挙げている。あとは、『当世書生気質』（坪内逍遙、明治18年）まで「僕」の例がないというのである。庶民と一緒に牛肉の話をしている元武士の「僕」には、「志士の連帯」の意味など感じられない。単なる連帯の意味すらもないだろう。こうした「僕」は、元武士がいなくなれば消えてしまったとしても不思議でなかった。

日本はすべての点で欧米の列強諸国に追いつかなければならなかった。そ

のために教育制度の整備が緊急の課題であった。明治5年に学制が布かれ、高等教育がはじまった。大学もでき、留学制度も実体化した。明治10年代には、やがて日本の未来を背負って立つことになる「書生・学生」という新人類が出現した。加藤（1982）は、『当世書生氣質』では「書生同志の気楽な感じでの会話に「僕」がさかんにあらわれる」（p. 53）とし、4例掲げている。さらに、円朝口演『怪談牡丹灯籠』（明治17年頃）、『黄薔薇』（明治18年）、『英国孝子ジョージスミス之伝』（明治18年）から合わせて7例挙げている。これらの例から、明治10年代には士族出の一般男性も「僕」を使うようになっていくことがわかる。明治20年代になると、「僕」の使い手が多様化し、官員、文学士、教員、巡査、医者などが使うようになっていく。少年が「僕」を用いている例も少なくない。30年代以降は目上に対しても初対面の人にも使えるようになり、「僕」が男性自称詞として一般化してきていくことがわかる。

江戸時代の「僕」は、主として書簡自称詞として広がったものであった。加藤（1982）の掲げている例はすべて話し言葉における「僕」である。明治においてなぜ「僕」がとくに会話的な言葉として復活したのだろうか。理由は、いくつか考えられるがここでは、その問題に深く立ち入らない。とにかく、書生・学生という新たな身分を引き受けた青年たちは、彼らなりのアイデンティティを表現する必要があった。彼らが消えそうになった「僕」にポジティブな意味づけをして話し言葉として復活させたのではないか。しかし、「僕」は書簡においてはすぐには主流にならなかった。書簡自称詞としては「小生」が主流になった。なぜだろうか。言文一致運動の昂揚とともに、やがて書簡でも「僕」が「小生」に取って代わっていくのだが、その問題は次節に譲ろう。

### 3. 吉田松陰と夏目漱石

まず、吉田松陰と夏目漱石の書簡自称詞の比較によって、江戸から明治中頃にかけて自称詞パターンがどう変化したか大雑把に把握しておこう。

松陰は、人並みでない数の手紙を書き、松下村塾の弟子たちを始め大勢

の勤王志士に送っている。松陰書簡（『日本思想体系54』）は全部で245通あるが、家族宛て書簡を別にし、受取手不明の書簡を除いた222通を友人・知人宛てとして分析した。漱石も松陰以上に手紙を書く人であった。『漱石全集』（1936）の16-17巻の2巻がまるまる書簡にあてられている。ここでは、英文書簡2通を除き、書簡集第16巻の初め（明治22年）から39年までの書簡のすべて529通を自称詞分析の対象にした。漱石が正岡子規と出会い、イギリス留学を経験し、職業作家としての道を歩み始めるまでの17年間の書簡である。そこからすべての自称詞を取り出すと、13種類の自称詞945例が得られる。529通のうち「家族宛て」が27通（妻宛て：23、兄宛て：2、義父中根宛て：2）、「友人・知人宛て」が502通である。松陰の場合は家族宛ての書簡がかなり多い（245通のうち、71通が父、叔父、妹）。漱石の場合は、家族宛ての書簡が少ない。いずれにしても、家族宛て書簡の自称詞は、友人や親しい知人宛ての書簡と違い、ある種の権力原理（家族的タテ型人間関係）が作用しているので、ここでの自称詞表には入れない。

表1 松陰書簡における友人・知人宛て書簡の自称詞

自称詞	僕	われ	小生	余	我が輩	固有名	拙生	拙者	私	劣生	生	我身	合計
例数	380	149	91	43	20	15	10	9	7	2	1	1	728
%	52.2	20.5	12.5	5.9	2.8	2.1	1.4	1.2	1.0	0.3	0.1	0.1	

表2 漱石書簡における友人・知人宛て書簡の自称詞

自称詞	僕	小生	余	小子	我が輩	小弟	迂生	拙者	吾	吾人	己	当方	他	合計
例数	418	255	12	4	3	2	2	1	1	1	1	1	1	702
%	59.4	36.2	1.7	0.6	0.4	0.3	0.3	0.1	0.1	0.1	0.4	0.4	0.1	

松陰と漱石の自称詞表で第一に目につくのは、どちらも「僕」が圧倒的に多いことである。第二に、松陰では「僕」に和語自称語の「われ」が続くが、漱石では「僕」に続いて多いのは「小生」である。第三に、松陰では主流で

あった「われ」が、漱石ではほとんど使われなくなっている。維新の混乱をくぐり抜けて近代の自称詞となって残ったのは、「僕」と「小生」だった。この傾向は漱石だけにかぎらず、漱石と同年か、それ以後の文学者たちに共通のパターンであった。筆者の観察した例では、漱石と同年の幸田露伴（『露伴全集39』）、正岡子規（『漱石・子規往復書簡集』中の子規書簡）、漱石より3歳年下の高山樗牛（『樗牛全集6』）がそうであった。

しかし、漱石書簡集は、明治22年（1889、漱石22歳）以降の漱石書簡を集めたもので、表2には、前節で見た「明治20年代以前」の言語状況が含まれていない。維新の子供たちも、当初は「僕」を言文一致に結びつけて考えていなかったように思う。維新が終った時すでに10歳になっていた坪内逍遙は、書簡において「僕」を使うことを好まなかった。『坪内逍遙書簡集』（2013）には書簡2197通が収録されているが、多くは出版や会合の打ち合わせなど短いもので、ほとんどの書簡が候文で書かれ、自称詞は「小生」が主流である。「小子」「小弟」があり、「私」もまれに使われている。高齢になると、漢語自称詞「老生」「老骨」が多くなる。ここでとくに重要なのは、「僕」がまったく使われていないことである。

二葉亭四迷は、「僕」を使っていることはいるが、「小生」よりずっと少ない。『二葉亭四迷全集14』に明治13年から42年までの325通の書簡がある。月日不明書簡と編集校正に関する簡条書きの長い手紙を除いて、283通を見た。自称詞は全部で449例あり、そのうち404例が「小生」で、「僕」は16例しかない。

森鷗外は、『鷗外全集36』が明治14年から大正11年までの書簡1654通を所収しているが、家族宛ての書簡がきわめて多い。個人的なことを打ち明けられる友人としては学生時代からの親友賀古鶴所以外いなかったようである。賀古宛て書簡205通を辿ってみたが、彼に対しても「僕」はほとんど使われていない。

明治10年代以降は、話し言葉としての「僕」は広がる傾向にあったが、書簡では「小生」が主流であった。表2に見られるパターンが顕著になったのは、明治20年代に入ってから、つまり、漱石ぐらいの年代が手紙を書くよう

になってからだと考えられる。漱石の場合、ロンドンへ行く前には子規に対しても主に「小生」を使っていた。「僕」が本格的に漱石書簡の主流自称詞になるのは明治33年ロンドンに行ってからである。

#### 4. 夏目漱石一人と思想

漱石は、江戸時代の伝統を引き継ぎながら欧化主義全開の近代の始まりを象徴的に生きた小説家一言語の実践者一であった。明治維新の前年（1867）に江戸で生まれて江戸で育った。江戸町名主の息子として漢学の早期教育を受け、16歳で本格的に英語を学び始め、大学では英文学を専攻した。江藤（1979：348）は、漱石の自由さ、形式嫌悪を、近代に近いところにいた人という意味で、近代文化の「最初の人」だったと見る。

鵜外は、当時の多くの地方出身者がそうであったように、江戸の言葉を一種の「外国語」として修得しなければならなかった。それに対して、言文一致の近代日本語は、漱石にとって身体から自然に流れ出てくる母語に等しかった。近代日本語の素地となった江戸言葉のネイティヴスピーカーであったのだ。それに漱石は落語好きでもあった。10歳ぐらいから講釈を聴きにいったという。その上、漢文教育を通して前近代の高位言語を修得し、続いて近代の高位言語となる英語を修得し、やがて英国に留学し、西洋の文化を<sup>なま</sup>生で体験した人であった。鎖国を解いたばかりの日本の青年としては言語的にもっとも有利な背景を持っていた。にもかかわらず、イギリスに留学した際のカルチャーショックは深刻であった。日本文化とイギリス文化のギャップは、漱石を圧倒してしまうほど大きかった。

漱石が最初に深い友情をもって書簡交換を行ったのは、漱石と同じ1867年生まれの子規であった。二人の友情は一高の学生時代、互いに寄席好きであったことから始まり、明治35年（1902年）子規が没するまで続いた。二人の友情がどんなものであったか、それぞれが言文一致をどう実践したかを知る資料として『漱石・子規往復書簡集』（以下『往復書簡集』とする）を参照した。子規は、病気で手紙を書けないことが多かったが、それでもほぼ13年間に48通の手紙を漱石に書いている。漱石から子規へは89通の手紙が送

られている。漱石は子規の影響で俳句に興味をもち、子規に俳句を送って添削してもらっていた。漱石から子規への書簡には、子規の添削を求める句稿ばかりのものが何通もある。子規は、それらを添削し、○を付けて送り返してやっていた。彼らは、その他さまざまな問題について真剣に論じあい、学びあった。中に漱石の平等主義の証しとなる論争もあった。

明治維新によって士農工商の身分制度が廃止されたとはいえ、明治期のもとサムライたちや、その子供たちは、前近代の階級意識をまだひきずっていたのだろうか。地方の士家の長男として生まれた子規も、階級意識が多少強かったのかもしれない。ある時、「今の学校では、工商の子供が士家の子供より優位にたつものが多いが、学校を出れば、やっぱり士家の子にはかなわない」というようなことを夏目漱石宛ての手紙でもらした（この子規の書簡は失われてしまって入手できない）。これに対して、漱石は長い手紙（『往復書簡集』[漱22]）で答えている。それは君個人の経験によるものか、それとも「統計などにていうや」、「君の議論は工商の子たるが故に気節なしとて四民の階級を以て人間の尊卑を分かつたかの如くに聞こゆ」、君がそんなことをいうならば、「われこれに抗して工商の肩を持たんと欲す」と責めている。漱石は、工商の子供たちには士家の子供たちのように勉学に専心することができない状況があり、学問においては士家の子供たちにはかなわないことが多い現実を認めてはいた。しかし、子規の階級差別的言辞を見過ごすことができなかった。漱石は、平等主義においても吉田松陰に似ている。

漱石が当時門下生だった鈴木三重吉（児童文芸誌『赤い鳥』の創刊者）に与えた書簡に次の文がある。「僕は一面に於て俳諧的文学に出入りすると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやって見たい」「維新の當士勤王家が困苦をなめた様了見にならなくては駄目だらうと思ふ。間違つたら、神経衰弱でも気違でも入牢でも何でもする了見でなくては文学者になれまいと思ふ」（『漱石全集16』書簡479）。

「維新の子供たち」は欧米諸国に劣らない近代的な文学を日本国にもたらすことが使命であると信じて創作活動を行っていた。その意味で彼らは多か



れ少なかれナショナリストであった。漱石も例外ではない。漱石が『文学論』序の冒頭において「余は日本の臣民なり」と述べる時、松陰の「僕は毛利家の臣なり」という文章を思い起こさせる。前近代と近代という時代的な枠を外してみると、平等主義的信念と志士の気概という点で、漱石は松陰そのものであった。

## 5. 漱石の言文一致宣言

漱石の友人・知人あての書簡文を観察していると、面白いことに気づく。連帯原理の「僕」は、上述したように、漱石と子規の交友が始まった頃には、自称詞の主流というわけではなかった。「僕」が中国語において身分の低い家僕たちの間で使われる自称詞であったこと、「小生」が平安時代から貴族たちによって使われた自称詞であったことを考えあわせると、「僕」は「小生」よりも俗臭の強い自称詞であった。だから、候文と相性がよくなかった。

候文の歴史はきわめて古い。小松（2003：91）によれば、平安時代の末期に著作された『きれいもんどう貴嶺問答』が「候」という文字の使い方など、手紙の書き方について詳しく述べているという。手紙を書くことが有文字階級の特権であった頃から続いてきた候文は、一種の階級言葉であり、権力原理の表出である。極端に言えば、下級階層の連帯原理的な自称詞である「僕」は、権力原理的候文と意味的に衝突する。それに、俗語革命の思想に添って言えば、候文はなくしたい文体であった。

それでも、明治20年、30年当時は候文で手紙を書くことが教養ある者の常識であった。『往復書簡集』を一覧すると、冗談もあり、外国語もあり、漢文もあるが、どれも基本的には候文である。子規の書簡に極めて例外的な言文一致体書簡が2通あるがこれについては、第6節で例を挙げる。

漱石と子規の文通からもっとも簡単な候文の例を挙げておこう。（例文について：1. 『漱石全集』の原文には句読点がないが、例文では文末と思われる位置に句点を入れた。2. 『往復書簡集』からの例文は、編者の現代語表記をそのまま使用した。3. 『漱石全集』からの例は [書簡番号] を記し、『往復書簡集』からの例は、編者にしたがって [規47] [漱85] のよ

うに、書き手別の書簡番号をしめした。4. “/” は、改行の記号である。5. 例文中の下線は筆者による。）

例 1 a. 子規から漱石へ（明治23年 7月15日）[『往復書簡集』規 2]

両度の御手紙拜見、小生ハ如何なる前世の悪業にや今度の試験にもとう  
／＼及第せしよし誠ニありがた迷惑ニ存候。

例 1 b. 漱石から子規へ（明治22年 9月15日）[『往復書簡集』漱 5]

小生も房州より上下二総を経歴し、去年三十日始めて帰京仕候。

書簡の書かれた日時や状況を調べていくと、漱石の言文一致への転向は、イギリス留学がきっかけだったことが明らかになる。

明治33年（1900年）、高等学校教授を留学生として海外に派遣することになり、その第1回として藤代素人と夏目金之助（漱石）が選ばれた。9月8日プロイセン号で横浜を出航し、10月28日にロンドンに到着した。藤代はドイツ語専攻であったから、大学時代に漱石と親しくなる機会はなかったと思う。とはいえ、1ヶ月以上も同じ船上で生活したわけだから、いろいろ話し合う時間が十分あっただろう。漱石は、ロンドンからベルリンの藤代宛てに絵はがきや書簡を送っている。藤代宛ての書簡は、すべて自称詞が「僕」、文末詞が「言文一致の会話体」（「言文一致の会話体」という用語は、下の例4で漱石自身が名付けているもの）である。こういう文体を（僕＋言文一致の会話体）と表記することにしよう。漱石がロンドン留学をきっかけに言文一致体に転向したことの証拠1がこの藤代宛ての書簡である。漱石がロンドンについてから初めて藤代に送った絵はがきには次のような文が書かれている。

例 2. 藤代宛て絵はがき（明治33年11月20日）[『漱石全集』93]

倫敦<sup>マ</sup>ノ天氣の悪 [イ] ニハ閉口シタヨ。君等ハ大ゼイ寄ッテ御全盛ダネ。  
僕は獨リボッチデ淋シイヨ。

その後の藤代宛て書簡 [『漱石全集』 95、97、100、108] もすべて {僕 + 言  
文一致の会話文} である。

ロンドンについてから一月、漱石は、下宿探しやら何やら多忙を極めた。  
子規宛てにロンドンから初めて絵はがきを書いたのは、イギリスに着いて  
1ヶ月後、クリスマスの翌日であった。

例3. ロンドンから子規へ (明治33年12月26日) [『往復書簡集』 漱85]

その後御病氣如何。小生東京の深川の如き辺鄙に引き籠り勉強致をり候。  
買たきものは書籍なれどほしきものは大概三、四十円以上にて手がつけ兼  
候。// 詳細なる手紙差し上げたく候へども何分多忙故、時間惜き心地致し  
候故、端書にて御免蒙り候。

文体が藤代宛ての書簡と対照的に違う。自称詞が「小生」であること、文末  
詞が「候」であることでは、日本にいた時の漱石の書簡文と変わらない。

次の例は、親友4名宛ての書簡。日本にいる親友たちに対する言文一致宣  
言になっているだけでなく、漱石得意のユーモアの効いた文なので、少し長  
めに引用しておこう。

例4: 狩野、大塚、菅、山川へ (明治34年2月9日) [『漱石全集』 101]

其後は何方へも御無沙汰をして済まん／＼と<sup>て</sup>思<sup>て</sup>居ると一昨七日山川君  
から年始状が来た。續いて菅君からも繪端書が来た。かうなるといかな無  
精な拙者でも義理にも黙って居られないといふ譯で勇猛心を鼓舞して今土  
曜の朝を抛って久し振りに近況を御報告する事にした。尤も諸君へ別々に  
差上るのが禮ではあるが長い手紙を一々かくのは頗る困難であるから失禮  
ではあるが一纏めの連名で御免蒙る事とした。夫から例の候の奉るのは甚  
だ厄介だから少し気取って言文一致の会話體に致した。右不<sup>レ</sup>惡御了承を願  
ふ。】// 着後の景況を詳しく述べるには紙数に限りありといふよりも時間  
に限りありで到底出来にくいから一寸かいつまんで申上様。(略)

漱石がイギリス留学を機会に言文一致に転向したことの証拠<sup>2</sup>である。書簡全体で自称詞が18例ある。17例が「僕」、1例が上記例文中の「拙者」である。「小生」はない。言語学的なコンセプトでいうなら、「僕」が無標<sup>unmarked</sup>の男性自称詞、「拙者」が有標<sup>marked</sup>の自称詞ということになるのか。無標の自称詞は何気なく聞き過ごされてしまうが意外なコンテキストで使われた古語自称詞「拙者」は、読み手を一瞬驚かせ、そして笑わせる。相手と笑いを共有しながら言文一致という一大事を受け入れさせてしまう魂胆が潜んでいる。漱石が友人・知人への書簡でよく使う技である。

この書簡からも窺えるが、漱石は多忙で親友の子規にさえ手紙を書く時間がなかった。そこで考えたのが、子規への手紙を雑誌『ホトトギス』に掲載してしまう方法である。当時の『ホトトギス』の読者数は300だった。

ロンドンの漱石から子規に送られた2通目の書簡は、次のような子規・虚子に宛てたメッセージ文と、それに続けて書かれた「日記体」からなっている。日記体部分が、やがて「倫敦消息」として「ホトトギス」に掲載されることになったものである。証拠<sup>3</sup>である。

#### 例5 a. 子規・虚子へ（明34年4月9日）〔『往復書簡集』漱86〕

その後は頓と後無沙汰をして済まん。君は病人だから固より長い手紙をよこす訳はなし。虚子君も編輯多忙で『ほととぎす』だけを送ってくれる位が精々だろうとは出立前から予想しておったのだから、手紙が来ないのはさまで驚かないが、此方は倫敦<sup>ロンドン</sup>という世界の勸工場<sup>かんこうば</sup>のような馬市のような処へ来たのだから、時々は見た事聞た事を君らに報道する義務がある。これは単に君の病気を慰めるばかりでなく虚子君に何でも良いからかいて送ってくれろと二、三度頼まれた時にへい／＼よろしゅう御座いますとおおよう<sup>おおよう</sup>大揚に受合ったのだから手紙をかくのは僕の義務さ。それは承知だが僕も遊びに来た訳でもなし酔狂にまごついて居る仕儀でもないのだから可成時<sup>なるべく</sup>間を利用しようと思うのでね遂々<sup>ついつい</sup>いず方へも無音になってまことに申訳がない。

ここから先が「倫敦消息」の原稿になった日記体である。現代のITコミュニケーションに喩えていうなら、添付付きEメールのようなものである。子規・虚子宛ての私信がEメールにあたり、日記体部分は添付ファイルだと考えればいい。私信メール部分も添付の日記体部分も同じスタイルの言文一致体である。たとえば、「七時二十分だ」「見てやった」「開かれて居る」「御光栄である」「検査した」「場末さ」「もぐら持ちだね」・・・といった形式である。

ただし、重要な違いが一つある。Eメールでは自称詞が<sup>unmarked</sup>無標の男性自称詞「僕」であるが、添付の日記体では「吾輩」に変わる。そして、日記体文が終わったと思われるあたりに、日付と「子規君 // 虚子君」という宛名が入り、最後に次のような括弧付き結び文が書かれている。

例5b. 子規・虚子宛て（明治34年4月9日）[『往復書簡集』漱86]の結び文（もう厭になったからこれで御免蒙る。実は僕の先生の話をしたいたのだがね、よほどの奇人で面白いのだから。しかし、少々頭がいたいからこれで御勘弁を願おう。//『ほととぎす』拝見、君の端書も拝見、病気がよくないそうだ。困るね、まー／＼用心するがいい。）

無標の自称詞「僕」が使われていることによって、子規と虚子に宛てた私的なメッセージであることがわかる。

書簡[漱87]は、後に「倫敦消息二」として『ホトトギス』に発表されたものである。[漱86]と同じく子規に送られた書簡ではあるが、[漱86]と違って、始めから日記体になっている。「また『ホトトギス』が届いたから出直して一席伺おう。吾輩の下宿の体裁は・・・」と、寄席の雰囲気である。自称詞は「吾輩」が24例、「乃公」(<sup>だいこう</sup>「吾輩」に近い古語自称詞)2例、「小生」2例、「拙者」1例。「固有名自称」が1例ある。無標の「僕」はない。固有名自称法の例を挙げておこう。漱石が初めて下宿した家の家主で、「生意気」で、「知ったかぶり」で、つまらない英語を使っては漱石をいじめた女性の話である。

例6. 子規・虚子へ（明治34年4月20日）〔『往復書簡集』漱石87〕日記体部分から

先達でトンネルという字を知って居るかと聞た。それから straw すなわち藁という字を知って居るかと聞た。英文学専門の留学生もこうなると怒る張合もない。近頃じゃ少々見当が付たと見えてそんな失敬な事も言わない、また一般の挙動も大に叮嚀ていねいになった。これは漱石が一言の争もせず冥々の裡にこのお転婆を屈服せしめたのである。

漱石から子規宛ての3通目書簡（倫敦通信三）には自称詞「吾輩」が39例あり、文末詞は言文一致体。例を挙げるまでもないだろう。古語になりつつある自称法「吾輩」「乃公」「拙者」そして「漱石」、いずれも日記体を面白可笑しくするレトリックである。漱石自身登場人物の一人であると同時に報告者でもある。「三人称的自称詞」と言えがいいだろうか。子規・虚子宛てに送られた3通〔漱86、87、88〕を合わせると「吾輩」が73例ある。

漱石が考案したこの三人称的自称詞を使った日記体書簡は、文学作品として書かれたのではなかった。病気で苦しんでいる親友子規を慰めるために書き続けられたものだった。例7の子規の手紙からもわかるように、日記体は子規を心から喜ばせていたのだった。

松岡（1956：185）は、漱石が帰国直前に酷い神経衰弱に悩んでいた時に「自転車日記」というエッセイを書いたこと、これがロンドン消息と相通ずるもので、「ある意味で『猫』の先駆をなすものだ」と書いている。子規への手紙—『倫敦消息』—『自転車日記』—『吾輩は猫である』。たしかに繋がっている。

江藤（1979：376）が、『吾輩は猫である』について、それがいかに偶然に、自然発生的に書かれたものであったか、漱石自身の談話を引用しながら説明している。「それまで英文学者としての「役割」におおわれて地下に底流していた漱石の感受性—ロンドンの危機も揺るがすことのできなかった彼の生命の形式がここで神経症の圧迫をはねのけ、しかも文壇の流行にかかわりなく噴出しはじめた」のである。

## 6. 最後の手紙一言文一致体

子規の病状は悪化しており、10月には、その苦痛は自殺を考えるほどになっていた。例7は、そんな病状の中で子規がありったけの力をふりしぼって漱石に書いた最後の書簡である。文数は22あり、すべて一言文一致、自称詞は、もちろん「僕」(9例)である。

例7：子規から漱石へ(明治34年11月6日) [『往復書簡集』規48]

僕ハモーダメニナツテシマツタ、毎日訳モナク号泣シテ居ルヨウナ次第ダ、ソレダカラ新聞雑誌ヘモ少シモ書カヌ。手紙ハ一切廃止。ソレダカラ御無沙汰シテスマヌ。今夜ハフト思イツイテ特別ニ手紙ヲカク。イツカヨコシテクレタ君ノ手紙ハ非常ニ面白カッタ。近来僕ヲ喜バセタ者ノ随一ダ。(略)君ノ手紙ヲ見テ西洋へ往<sup>いつ</sup>タヨウナ氣ニナツテ愉快デタマラス。モシ書ケルナラ僕ノ目ノ明イテイル内ニ今一便ヨコシテクレスカ(無理ナ注文ダガ)。たしか // 絵ハガキモ 慥ニ受取タ。ロンドン 倫敦ノ焼芋ノ味ハドンナカ聞キタイ。やきいも

子規の書簡に「極めて例外的な書簡が2通ある」と前節(第5節の初めの方)で述べた。この子規の「最後の書簡」がその1通である。もう1通(明治33年2月12日)は、漱石の熊本時代に書かれた、子規の闘病の苦しさを訴える長い長い書簡である(『往復書簡集』規44)。前半は〈小生+候〉体、中程で自称詞「僕」が出て来て、一言文一致体になる。「僕ガ生キテ居ル間ハ『ホトトギス』ヲ倒サヌト誓ツタコトガアルト思ウトモー涙ガ出ル。」長い点線が引かれ「コノ間落泪」となっている。子規が泣きながら書いた書簡である。「落泪」後は、「最後の書簡」とまったく同じ{僕+一言文一致}スタイルで統一されている。子規も一言文一致体の実践者になっていたのだ。

明治35年9月子規永眠、翌年1月に漱石は帰国した。

こうして、維新の子供たちの、命がけの友情は、一言文一致体を完成させて終った。明治38年には、ロンドンで磨いた一言文一致の日記体スタイルで書い

た『吾輩は猫である』が『ホトトギス』で発表され、大好評だった。明治39年には、8月まで『吾輩は猫である』を継続発表し、4月には『坊ちゃん』も発表した。明治40年には、一切の教職を辞して職業作家になる道を歩み始めた。『虞美人草』『それから』『門』『心』・・・、言文一致体をもとに、次々と近代小説を完成し、未完の『明暗』を絶筆として漱石は逝った。大正5年(1916)12月であった。

漱石の小説が100年を経た今でも読まれるのは、その言文一致体が現代日本語とほとんど変わらないからである。明治の作家夏目漱石の文学とポストモダン作家の村上春樹の文学を比較研究できるのは、漱石のモダン言文一致体が、村上の日本語と同じように読める日本語だからである<sup>(5)</sup>。

## 7. おわりに—学際的な研究としての Auto/Biographical Research

「言文一致運動」のように政治的、言語学的、文化的、歴史的な思惑が交錯している複雑な出来事は、数量的な観察にもとづいて現在・未来を簡単に予測することができない。近年活潑化している A/B R の考え方を取入れて、数量的な事実を鑑みながら、質的に有意義な研究ができるかどうか、試してみた。漱石が留学をきっかけに言文一致に転向する決心をしたということは、これ以外の方法では見えてこなかったと思う。自称詞「僕」と言文一致体の関連についても、それがきわめて言語的な事象であるにもかかわらず気づけなかったかもしれない。更に、言文一致体の使用が広がるとともに「小生」が減っていく傾向も垣間見えた。そこから現代日本語の自称詞問題に繋げていくのはそう困難ではない。不十分ではあるが、言文一致とは何であったのか、多少の言語学的な示唆が得られたとすれば幸いである。

### 注

- (1) 吉田・井之口 (1964 : 44-47)。英文書簡の初めの一部を筆者が訳した。
- (2) 戯作排撃論については、前田 (2005 : 213) で、橋川文三と前田愛が論じている。
- (3) Auto/Biographical Research は、利用範囲の広い学際的な領域であるが、実際に自分のテーマに応用するとなると、むずかしい。Dr. Craig Howes (University of



Hawaii A/B R Center) から有益な教示を受けた。感謝したい。以下は、彼の説明の一部を筆者が訳したものである。〈この領域は、一般に自伝、回顧録、伝記など、なじみのフォームを扱うのだが、日記、オンライン・ポスティング、映画、絵物語、書簡（この場合のように）など、<sup>ライブ</sup>生を表現するモード、あるいは、手段にもフォーカスする。どんな研究領域でも実際には人がどう表現されているか、または、自らをどう表現しているかを大なり小なり扱うものなのだから、A/B R は、きわめて学際的なものである。同時にそれ自体の領域の研究テーマをしっかりと掴んでいなければならない。〉

- (4) 吉田松陰の「僕」については、データ、例文も含めていろいろ(2018) 参照。  
(5) たとえば、柴田 (2011)。

#### 引用文献

- 姉崎正治・畦柳都太郎他編 (1916) 『樗牛全集 6 日記及消息』 博文館  
アンダーソン、ベネディクト (1997) 白石さや・白石隆訳『増補 創造の共同体：ナショナルリズムの起源と流行』 NTT 出版  
江藤淳 (1979) 『決定版 夏目漱石』 新潮文庫  
蝸牛会編 (1949) 『露伴全集39』 岩波書店  
加藤照美 (1982) 「明治期における『僕』の用法」『日本文学ノート』 16 pp. 50-61  
宮城学院女子大学日文学会  
小松茂美 (2003) 「手紙の歴史」河出書房新社編集部編『手がみのことば』 pp. 87-110  
河出文庫  
柴田勝二 (2011) 『村上春樹と夏目漱石—二人の国民作家が描いた〈日本〉』 祥伝社新書  
桂秀実 (1995) 『日本近代文学の〈誕生〉 言文一致運動とナショナルリズム』 太田出版  
夏目漱石 (1936) 『漱石全集16』 漱石全集刊行会  
二葉亭四迷 (1953) 『二葉亭四迷全集14』 岩波書店  
前田愛 (2005) 『關なる明治を求めて 前田愛対話集成 I』 みすず書房  
松岡譲 (1956) 『夏目漱石』 河出文庫  
森田太郎 (1975) 『鷗外全集36』 岩波書店  
吉田澄夫・井之口有一 (1964) 『明治以降国語問題論集』 風間書房

吉田常吉・藤田省三・西田太郎校注（1978）『日本思想大系54 吉田松陰』岩波書店  
れいのるず秋葉かつえ（2018）「自称詞の歴史社会言語学的研究—「拙者」から「僕」  
へ—」『ことば』39 pp. 87-104 現代日本語研究会  
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館逍遙協会編（2013）『坪内逍遙書簡集』早稲田大  
学出版部  
和田茂樹編（2002）『漱石・子規往復書簡集』岩波文庫

(Katsue Akiba Reynolds)

(2019.11.27 受理)